



TITLE:

宣教師キャンベル・N・ムーディと 台湾基督長老教会一文脈化するキ リスト教の軌跡(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

三野, 和恵

CITATION:

三野, 和恵. 宣教師キャンベル・N・ムーディと台湾基督長老教会一文脈化するキリスト教の軌跡. 京都大学, 2016, 博士(教育学)

ISSUE DATE:

2016-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19445>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開; 許諾条件により本文は2018-10-05に公開

京都大学	博士（教育学）	氏名	三野 和恵
論文題目	宣教師キャンベル・N・ムーディと台湾基督長老教会 —文脈化するキリスト教の軌跡		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、イングランド長老教会が日本植民地支配下の台湾に派遣した宣教師ムーディ（Campbell N. Moody, 1865-1940）の宣教事業、および台湾基督長老教会信徒・聖職者のキリスト教論を、両者の相互関係に着目しながら分析したものである。</p> <p>分析にあたっては、台湾人牧師・黄彰輝（1914-88）の唱える「文脈化神学」という考えを基本的な枠組とした。すなわち、キリスト教という普遍的な「テキスト（text）」が特定の歴史的な文脈としての「コンテキスト（context）」において受容されるという一方向的な関係として分析するのではなく、「テキスト」が「コンテキスト」の問題性を開示すると同時に、「コンテキスト」が「テキスト」を問い直し、その解釈を更新するという双方向的な関係を「文脈化（contextualisation）」という概念で把握した上で、「文脈化神学」誕生の裾野となる歴史的経験を明らかにした。</p> <p>本論文は全五章から構成される。各章は全体として時系列的に構成されると同時に、第一章・第三章・第五章ではムーディ、第二章・第四章ではムーディとかわりをもった台湾人信徒・聖職者というように交互に焦点をあてることで、両者の相互作用を浮き彫りにすることに努めた。</p> <p>第一章ではムーディに焦点を据えて、グラスゴーにおける神学生時代から宣教初期（1895-1914）における自己形成の有り様を捉えた。具体的には、①「異教徒」をネガティブな類型的イメージによって捉える宣教師の姿勢を、植民地支配者のそれと同じ「冷酷な自己愛」として内省しながら、個々独自の人格を備えた存在として台湾人を描こうとしたこと、②その一方で、台湾人には、キリスト教を理解するための「精神」が歴史的に継承されていないという啓蒙主義的認識を根拠として、宣教師のリーダーシップを自明視していたことを明らかにした。また、③彼が台湾人改宗者には理解しがたいであろうと観察した「罪」の認識や「信仰義認」といった教えを、教会白話字で記した宣教文書において重点的に論じていたことを捉えた。</p> <p>第二章では、1895年から1927年までの台湾人キリスト者のキリスト教理解、及び教会形成論を扱った。具体的には、まず①勤勉な道徳主義的自助努力を通して「富強」を希求した李春生のキリスト教理解について、信仰を「保庇（守護と御利益の混合）」の獲得として捉える漢族台湾人の宗教文化の系譜にあるものとして確認した上で、②ムーディと深い関わりを持ったふたりの牧師、すなわち林学恭と廖得が、教会外にある他者の「苦しみ」への共感、教会内における祈りへの呼びかけ、個々の台湾人信徒自身の独立を基盤とする教会運営と宣教など、「保庇」とは異質な方向で教会形成を追求したことを解明した。</p> <p>第三章では、宣教後期（1915-31）のムーディのキリスト教宣教に対する問い直しの作業を捉えた。具体的には、①ムーディが1922年に台南神学校の臨時校長に就任した際に、重要科目の多くについて日本人教員による日本語の授業を行わざるを得ない体制への違和感を表明し、台湾人教師中心の神学校運営を求めたことを指摘した。また、②キリスト教理解は改宗者の「精神」の成熟度に左右されんとする啓蒙主義的発展史観を修正し、③台湾人信徒・聖職者らの教会自治運動に直面して、従来の宣教師主導論を克服し、宣教師と台湾人の間の教会運営における決定権や俸給の格差という問題に取り組むようになった過程を明らかにした。</p>			

第四章では、台湾人が自ら宣教の主体としての姿勢を明瞭に定立する 1928 年以降の台湾人信徒・聖職者の動向を分析した。具体的には、まず①ムーディの閩南系台湾語の教師であった牧師・林燕臣の議論を検討し、彼が「四百万同胞」としての台湾人全体に対する宣教使命を持ち、倫理的な社会として「神の国」のヴィジョンを打ち出したことを捉えた。その上で、②林燕臣が台南神学校教員として創刊に関与した台南神学校『校友会雑誌』を検討し、同誌が自治的台湾宣教の構想の場であったことを解明した。さらに、③林燕臣の息子であり、代表的なキリスト教知識人でもあった林茂生の論を分析し、「仲保者」としてのイエスへの信頼を通じた個人の「良心」の解放こそが積極的な社会倫理の基盤となると論じることで、教育勅語的な倫理観を暗に批判していたことを明らかにするとともに、総督府による迫害のためにこのような台湾人の自主的営みが 1934 年前後から極めて困難になったことを指摘した。

第四章補論では、南北台湾長老教会の聖職者を中心に刊行された和文雑誌『福音と教会』刊行の背景、書誌情報、及び記事内容を検討した。この作業により、同誌が台湾人信徒・聖職者にとって「危機神学」の受容作業を通して間接的に同時代の全体主義的風潮に抗する信仰のあり方を問い直すとともに、こうした文脈との関係でイエスによる救済の逆説性や信仰義認への理解を深める場でもあったことを指摘した。

第五章では、宣教師引退後（1932-40）のムーディにおける神学議論を考察した。まず、①台湾におけるキリスト者への迫害に関わる情報を受け止めた彼が、台湾人の反植民地主義ナショナリズムへの共感的姿勢を示す作品を執筆すると同時に、②民族的・社会的他者の「苦しみ」に無関心な欧米キリスト者に対し、「神の裁き」への警告を発するようになったことを明らかにした。

以上のように、宣教師ムーディ、及び台湾基督長老教会信徒・聖職者らは、植民地台湾というコンテクストにおいてキリスト教のテキストの意味を捉え返し、そうして再解釈したテキストに立脚しつつコンテクストを問うという作業を、ある程度まで共有していた。すなわち、両者は、双方向的な関係のなかで、帝国主義的状况からの解放にかかわる複合的な物語を紡ぐことになった。こうした経験が、戦後国民党による戒厳令体制のもとで黄彰輝が民主化運動に参加しながら、「文脈化神学」を提唱するにいたる前提条件を形成したのだと論じた。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、イングランド長老教会から日本植民地支配下の台湾に派遣された宣教師キャンベル・ムーディと、台湾人キリスト者の「出会い」の経験を明らかにしたものである。両者の出会いは、ムーディにとっては植民地台湾という歴史的コンテクスト抜きでは語れないようなキリスト教思想を醸成し、台湾人キリスト者の間ではキリスト教思想に立脚する「台湾人意識」、さらには人格的・政治的解放のイメージの構想を可能とさせた。こうして両者の内に生み出された相互触発的な関係が、日本植民地支配下台湾におけるキリスト教に独自の歴史的軌跡を形作ったことを明らかにしている。

本論文の功績は、第一に、歴史研究として、ヨーロッパと日本とアジアとのダイナミックな関係を明らかにしたことにある。ヨーロッパ世界による文明化作用をまず日本が受け取り、今度はそれを日本が主体となってアジア諸地域に広めていくという見方が、近代日本の作り上げた自画像だった。これに対して、本論文では、スコットランド出身の宣教師と台湾人キリスト者との双方向的な影響関係と相互理解の深まりによって、日本はもとより、ヨーロッパ世界それ自体をもその「冷酷な自己愛」という観点から厳しく告発する思想が紡がれたことを明らかにしている。もとより、本論文で着目した宣教師ムーディはヨーロッパ世界の代表ではなく、むしろ例外であり、異端ともいべき存在である。しかし、これを参照点とすることにより、一方向的・一元的な文明化作用を前提とする従来の歴史像を相対化する可能性を見出した意義は小さくない。

第二に、教育ではなく宗教をめぐる問題に特化して論じることにより、逆説的に教育研究に対する重要な問題提起ともなりえている。宣教師ムーディは街頭で台湾人に呼びかけ、対面的な関係のなかでイエスによる「救済」について論議することを重視していた。この宗教論議の言葉は、もちろん、台湾におけるネイティブの言葉（閩南系台湾語）であった。他方で、ムーディは、台南神学校の校長に就任した際に「国語」としての日本語中心の教育体制と折り合いをつける作業への徒労感と嫌悪感を率直に表明している。植民地支配下であるがゆえに極端な形であらわれてはいるものの、こうした事実は、ムーディの求めるような人格的「出会い」が、はたして学校という制度化された空間の中でも可能なのかという根本的な問いに連なるものである。宗教との関係で教育という営みにかかわる臨界ともいべきものをどのように考えるかということは、普遍的で本質的な問題であり、本論文は、こうした教育哲学的な問いを深めるのに重要な素材を提供していると評することができる。

第三に、台湾研究として見たとき、資料の収集と読解という側面において、日本における台湾研究を新しいステージにせり上げるような貢献をしている。日本植民地支配下の台湾の歴史については、日本語で記された公文書や新聞を基本としながら、台湾人の側の文献として中文の資料にも目を配るといスタイルが一般的だった。これに対して、本論文では、イギリスにおける資料調査をふまえてイングランド長老教会宣教師にかかわる英文資料を丹念に収集し、利用している。さらに特筆すべきことは、台湾留学を通じて深めた語学力を生かして、日本における台湾研究としては初めて、台湾のネイティブの言葉をローマ字で表記した教会白話字の刊行物（ムーディの宣教文書や『台湾教会公報』）を縦横無尽に活用していることである。本論文にとって直接的な先行研究のひとつに駒込武による台湾の教会学校史研究があるものの、駒込の研究では白話字の資料はわずかにしか利用できていない。この点で本論文は先行研究の水準を確実に凌駕しているといえる。

もちろん、本論文に残された課題も少なくない。

第一に、思想研究として見るならば、「他者」「共感」「苦しみ」「出会い」といった概念それぞれをめぐる哲学的思考をふまえて論じられるべきだが、この点は不十分である。他方、歴史研究として見るならば、ムーディのかかわった教会と地域社会の関係、台南神学校の教育体制など、実態としてさらに詰めるべき余地が大いに残されている。

第二に、キリスト教にかかわる「テキスト」とはなにか？聖書とその注解のような印刷に限定して考えるのか、それとも、より抽象的な「教え」というような意味に解するのか、「テキスト」の意味をより丁寧に腑分けして論ずる必要がある。

第三に、本論文の知見をふまえて、同時代の朝鮮半島におけるキリスト教、あるいは戦後の台湾におけるキリスト教についてそれぞれの特質を語るとどのようなことになるのか。そこにムーディと相同的な役割を果たした宣教師を見出せるのか、見出せないのか。

口頭試問の中で、こうした問題が、今後、さらに取り組むべき課題として指摘された。

しかし、その重要性は当人のよく自覚するところであり、なんら本論文の価値をおとしめるものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 28 年 2 月 3 日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第 14 条第 2 項に該当するものと判断し、公表に際しては、(期間未定) 当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降